

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



January						
S	M	T	W	T	F	S
						1 2 3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

January 2026 vol.141

◆ 震災死没者追悼碑

所在地：岐阜県飛騨市宮川町丸山

交通：JR 高山本線「坂上」駅北東約 4km

安政 5(1858) 年 2 月 26 日、富山県南部から岐阜県の飛騨地方にかけて延びる跡津川断層の断層活動による、マグニチュード 7.3～7.6 と推定される地震が発生しました。この地震は、越中から飛騨北部にかけて、家屋の被害、土砂災害、山地の崩壊とそれに伴う河川の閉塞、その後の決壊など大きな被害をもたらした、のちに飛越地震と呼ばれるようになりました。1840 年代後半から 1850 年代にかけては、弘化 4(1847) 年善光寺地震、嘉永 7(1854) 年安政東海地震・南海地震、安政 2(1855) 年の江戸地震、そして安政 5(1858) 年の飛越地震と、大きな被害をもたらす地震が続いた時代で、中でも、善光寺地震と飛越地震は、内陸の活断層の活動によって山地部が強い揺れに見舞われ、大規模な山地災害が発生した地震として知られています。

飛騨地方では、富山県を経て日本海へ注ぐ神通川につながる、上流の支流沿いの集落における被害が甚大で、高原川筋の古城郡高原郷北部（現・飛騨市神岡町）や、宮川筋の同郡小鷹利郷（現・同古川町、河合町、宮川町）、小嶋郷（現・同古川町、宮川町）、庄川上流部の大野郡白川郷（現・白川村）の 70 か村が被害を受けました。70 か村の家屋の被害は、総家屋数 1,227 軒のうち、全壊 323 軒、半壊 377 軒にのぼり、約 6 割の家屋が被害を受け、総人口 8,456 人のうち、死者は 203 人に達し、負傷者も多数発生しています。

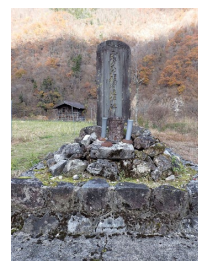
特に、断層沿いの村々の被害はひどく、高原郷佐古村や小鷹利郷中沢上村・森安村では全壊率 100%となりました。

また、山崩れによる犠牲者も多く発生しており、小鷹利郷元田村の荒町・立石地区では、9 戸が巻き込まれ 53 名が犠牲となり、小嶋郷丸山村（現・宮川町丸山地区周辺）では、7 戸が巻き込まれ、26 名が犠牲となっています。

26 名が犠牲となった丸山村は、神通川の支流となる宮川の川幅の比較的広い谷の中にあつた集落で、強い揺れにより、「丸山ながとら」と呼ばれる地点で大規模な斜面崩壊が発生し、集落の家々を飲み込みました。崩壊の規模は長さ 350m、幅は最大 550m、崩壊土砂量は 360 万 m³（バンテリンドームナゴヤ約 3 個分）とされ、崩壊土砂が宮川を堰き止めて天然ダムを形成しました。天然ダムの堰止高は 20m、湛水面積は 70 万 m²、湛水量は 470 万 m³に及び、4km 上流の嫁ヶ淵まで湛水した記録が残されています。

丸山地区では現在でも、断層活動により生じた断層崖や、大規模な斜面崩壊を引き起こした「丸山ながとら」の崩壊跡地形の一端を見ることができます。また、家屋が土砂に巻き込まれた現場には、震災死没者追悼碑が建てられています。碑は、この斜面崩壊に巻き込まれ一家 14 人全員が亡くなった家の縁者の方が、昭和 29(1954) 年に建てたもので、悲惨な災害を後世に伝えようという思いが込められています。

『日本の地形千景プラス』では、地震により高原川がずれた様子など、跡津川断層の断層活動がわかりやすく解説されています。（https://www.web-gis.jp/GeoGuideMapping_V3.html?01）



震災死没者追悼碑
(国土地理院 HP より)



◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

●蟹江城址 (vol.27,2016.7)

所在地：海部郡蟹江町城

交通：JR 関西本線「蟹江」駅 南西 約 800m

蟹江城は、永享年間 (1429 ～ 1440) に北条時任によって築かれたとされ、戦国時代には、最初は織田家の家臣であった滝川一益が城主となり、長島一向一揆鎮圧の拠点となるなど重要な城となっていました。その後、城は織田信雄の家臣、佐久間正勝のものとなって、天正 12(1584) 年の小牧・長久手の戦いにおいても合戦の舞台となり、秀吉方となっていた一益に一度は攻略されますが、信雄・家康勢の反攻に遭い、半月後に落城します。合戦で荒廃していた城を、翌天正 13(1586) 年、天正地震が襲い、城は壊滅しました。

天正地震では蟹江城のほかにも、清洲城（液状化）、飛騨帰雲城（帰雲山の山崩れにより埋没、城主内ヶ島一族は全員行方不明）、越中木舟城（倒壊、城主の前田秀継夫妻

など多数が死亡）、近江長浜城（全壊、山内一豊の娘と乳母が死亡）など、城郭の被害の記録が多く残されています。

天正地震は内陸活断層型の地震とされていますが、被災した城だけでも、海部の蟹江城から尾張、伊勢長島、美濃、飛騨、越中、近江と中部・北陸・近畿の広範囲にわたり、阿波でも地割れの被害が発生した記録が、さらには太平洋側の伊勢湾と日本海側の若狭湾で津波の記録が残されていて、被害の範囲は M8.0 とされる濃尾地震よりも広く、非常に規模の大きな地震であったことがうかがえます。

活断層型の地震は日本中どこでも発生する可能性があります。人々の生活する地域の直下で発生するため、非常に強く揺れる場所があります。建物の耐震性を確保し、家具の転倒防止を進めておきたいですね。



◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.27 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

★飛騨古川三寺まいり

飛騨古川三寺まいりは、毎年 1 月 15 日の夜に、親鸞聖人のご恩を偲び、古川町の町内 3 寺、円光寺・真宗寺・本光寺を詣でるならわしです。明治・大正期には、野麦峠を越えて信州の岡谷へ糸引きの出稼ぎに行き、1 年の奉公を終えた飛騨の女性たちが、着飾って瀬戸川沿いを歩いて巡拝し、男女の出逢いが生まれたことから、縁結びの行事としても知られています。

瀬戸川沿いには千本のろうそくが並び、2m の高さを誇る雪像ろうそくも灯され、幻想的な雪の世界が現れます。まつり広場には地元の屋台が立ち並び、飛騨の特産品やグルメが堪能できる「門前市」が開かれます。着物のレンタルも提供され、飛騨の文化や料理に触れることができます。



飛騨市公式観光サイトより

～鉄道で巡る～

JR 高山本線坂上駅は、昭和 8 年、富山駅から延びる国鉄飛越線の岐阜側の終点として開業し、翌年に高山線と結ばれました。

駅舎は山小屋風で、漫画による村おこしを狙って旧宮川村が設置した遊 ing ギャラリー（ベルギー絵本の図書館）が併設されています。高山駅側には関西電力坂上発電所があり、ホームから、宮川を泳ぐ魚がペイントされたサージタンクを望むことができます。



飛騨の駅 HP より

●ブレイクタイム●

♪ 棚田と板倉の風景 宮川町種蔵

飛騨市宮川町種蔵は、約 3.4ha にわたり広がる石積み棚田と、伝統建築の木造倉庫・板倉が織り成す日本の原風景が残る美しい景観の地区で、岐阜県による岐阜の宝もの認定プロジェクト『明日の宝もの』や「ぎふの棚田 21 選」、環境省の「全国かおり風景 100 選」に認定されています。地域住民を中心とした田植えや稲刈り、集落の保全活動など、飛騨の山里文化が伝承されており、石積み棚田の石積み補修を通して、空積み工法技術を学ぶ体験型イベントなども行われています。



飛騨市公式観光サイトより

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『Saito Seeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター 2026 年 1 月)